昔話集『ペンタメローネ』

国際教養学部４年　藤　井　美友紀

＜目次＞

はじめに
Ⅰ　『ペンタメローネ』とは
(1)　バジーレと『ペンタメローネ』
(2)　物語の構成
(3)　ナポリ色の強さ
Ⅱ　『ペンタメローネ』と他の童話集
(1)「いばら姫」と「日と月とターリア」
(2)「日と月とターリア」後半部分について
Ⅲ　『ペンタメローネ』とジェンダー
(1)　昔話のジェンダー観と『ペンタメローネ』
(2)　時代に適応する昔話
おわりに
参考文献

はじめに

どんな昔話を知っているかと問われて，思い浮かぶのは日本では「桃太郎」や「浦島太郎」，海外のものでは「シンデレラ」や「白雪姫」，「赤ずきん」などであろうか。それらは地域や時代によって細部に変化がある。例えば「桃太郎」の場合，流れてくる桃の数が違う，誕生の方法が桃から生まれるもの，老夫婦が桃を食べて若返り出産するというものと，地域ごとに様々な変化がみられる。さらに広げて考えてみると，「桃太郎」という名前ではなくても，似たような話は海外にも多く存在する。日本ではドイツのグリム兄弟や，フランスのペローによる童話集によって知られている海外の昔話も同様だ。

イタリアの昔話は日本ではそれほど知られていない。私も，イタリアの昔

話は何かと問われても，何も思い浮かぶものはなかった。そもそも，イタリアで生まれた物語というのもほとんど知らず，小説の『ピノッキオ』をようやく知っているくらいであった。しかし調べる中で，グリム兄弟やペロー以前に，古くから伝承されていた昔話を子供向けに書いたイタリアの作家ジャンバッティスタ・バジーレ（Gian Battista Basile, 1575-1632）という人物がいたことが分かった。彼の作品『ペンタメローネ』（*Pentamerone*）の中には，細部は変わっているが，私達に馴染みのあるような昔話が多数収録されている。この作品は後のグリムも注目し，影響を受けている。そして，世界中で共通の話の型が見られるように，当然グリムやペローの童話集の中の昔話と類似したものも，『ペンタメローネ』には多数収録されている。私は，著名なドイツやフランスの童話集以前に書かれていたこの作品が，どのような特徴を持っているのかに興味を持った。そこで，それぞれの童話集から共通の話の型を持つ物語を基に，それぞれの比較を行いつつ，バジーレと『ペンタメローネ』について深く考察していこう。

Ⅰ　『ペンタメローネ』とは

(1) バジーレと『ペンタメローネ』

『ペンタメローネ』は 1634 年から 1635 年に掛けて出版された，ナポリ方言で書かれた物語形式の昔話集である。著者のバジーレが生きていたのは 1575 年から 1632 年であり，彼の死後に出版されたことになる。『ペンタメローネ』という言葉は「五日物語」という意味で，その名前の通り，五日間の中で様々な物語が語られる。その語られる物語がナポリに昔から伝わる昔話であるが，独自の，特殊な内容の話というわけではない。むしろ，「いばら姫」や「シンデレラ」，「ラプンツェル」などの，グリムやペローが取り上げたような国際的に有名な昔話の原型を持つ昔話を多く含んでいる。昔話はもともと口承によって伝えられてきた文化であるので，世界各地に似たような話が存在している。しかし，『ペンタメローネ』の昔話の多くが国際的に有名なものである

のは，やはり驚くべきことであるだろう[1)]。

その『ペンタメローネ』を著したバジーレとはどのような人物であったのか。彼はイタリアの詩人・作家であるが，彼の職はそれだけではなかった。1575年のナポリ近郊のポジリポであまり裕福でない大家族の家庭に生まれたバジーレは，生活のためにイタリア国内の各地を傭兵として転々としていた。1604年頃にはヴェネツィア共和国に滞在し，クレタ島に配属され，その後ヴェネツィアでアンドレア・コルナーロ主催の「奇想アカデミー」（Accademia degli Stravaganti）に迎え入れられ，この頃から作品を発表し始めた。その後高名な女性歌手であった姉のアドリアーナの助力によりマントヴァのゴンザーガ公に宮廷人として一時仕えた後は，再びナポリに戻り，ナポリの宮廷で宮廷詩人として名を高めるとともに，行政官としてナポリ王国内の様々な土地で地方長官を終生務めた[2)]。

『ペンタメローネ』は彼が1632年に亡くなった時，まだ草稿の状態であり，『ペンタメローネ』という名前でもなく，タイトルは『お話のなかのお話』（*Lo cunto de li cunti*）とされていた。この『お話のなかのお話』は，遺族の手により1634年から1636年にかけて，五日間で構成されている物語を一日毎に分け，ほとんど校正も加えられていない状態で出版された。しかし，この作品はその当時ほとんど注目がされず，版を重ねることもほとんどされないで終わってしまった。長らく忘れられていた作品であるが，ポンペオ・サルネッリの活躍によってその状況は変化する。サルネッリが『お話のなかのお話』に校正を加えて誤植を修正し，『ペンタメローネ』というタイトルを加えて出版したことで，数多くの版を重ねるようになった[3)]。

それでも，『ペンタメローネ』はナポリ方言で書かれていたため，研究者を除いて広く読まれることは少なかった。『ペンタメローネ』の存在がヨーロッパじゅうに知られたのは『グリム童話集』（第3巻，1822年）のなかで紹介されてからである。その後，1846年にはF・リープレヒトによる独訳，1848年にJ・E・テイラーによる英訳などに翻訳されていった。さらに，1925年にB・クローチェによって共通イタリア語に翻訳されたことで，より多くの訳者を

得て広まり，バロック文学の傑作として評価されるようになった[4]。

日本に『ペンタメローネ』が初めて紹介されたのは大正から昭和にかけてであり，その後も数多くの紹介がされているが，いずれも一部の話を子供向けに書き直し，または原作をもとに改作されたものばかりであった。本格的な紹介がされたのは，塚田孝雄の『ペンタメローネ』（龍渓書舎，1994 年）であり，ここでは原文通りの内容で全 50 話の内の 20 話が訳されている。全文が完訳されたのは，1995 年に出版された杉山洋子・三宅忠明の『ペンタメローネ』[5]である。日本ですっかり浸透している『グリム童話集』が，1857 年にグリム兄弟が最終版を出してから，1887 年に菅了法（筆名は桐南居士）の『西洋古事神仙叢話』（集成社）によって一部日本語訳，日本ではじめて完訳が出たのは 1924 年の金田鬼一訳による『グリム童話集』（第 2 巻『世界童話体系』世界童話体系刊行会）で，それと比べると『ペンタメローネ』は 70 年も遅れて日本に伝わっている。『グリム童話集』は明治期の西洋文化導入の時期に児童向きの文学として取り入れられ教訓重視の方針にマッチしたため，盛んに読まれるようになったようだ[6]。

（2）物語の構成

次に，『ペンタメローネ』の物語について，深く見ていこう。まずは構成についてだが，先述のように，『ペンタメローネ』は，ただ昔話を集めただけのものではなく，全体でひと続きの物語という形式をとっている。つまり，一つの話を枠とし，その話の中でいくつかの物語が語られるという形式である。この形式は枠物語と呼ばれ，古くは古代インドから使用されている。『ペンタメローネ』作者のバジーレは 3 世紀前に『デカメロン』を書いたボッカチオに影響されてこの形式をものにした[7]。『デカメロン』が 10 日で 1 日 10 話ずつ 10 人の語り手に語らせるのに対し，『ペンタメローネ』は語り手の数や 1 日 10 話語らせているのは同じだが，日数は半分の 5 日であり，したがって語られる物語の数は半分となっている。しかし，一つ一つの物語は総じて『デカメロン』のものよりも長く，全体の量はそれほど変わらない。

それでは，『ペンタメローネ』がどのような設定の物語なのか見ていこう。この枠物語の全体の枠，即ち話の導入部に登場するのは，王女ゾーザと王子タッデオ，奴隷女，そして10人の語り手たちである。この物語のはじまりは次のようになっている。むかし一度も笑ったことのない王女ゾーザがいた。王が手を尽くしても笑うことがなかった彼女であったが，ある時いたずら小僧と老婆の喧嘩を目撃し，老婆の怒り狂った様子を見て初めて大笑いをしてしまい，そのことが老婆を怒らせて呪いをかけられてしまう。その呪いというのが「眠りの呪いが掛けられているタッデオ王子を婿に出来ないのなら，この先一生結婚できない」というものであった。妖精の力を借り，やっとのことで呪いが解けようという時，奴隷女にタッデオを横取りされてしまい，タッデオは奴隷女が呪いを解いてくれた人物と信じて妃にしてしまう。途方に暮れたゾーザだが，再び妖精の力を借り，妃となった奴隷女に昔話が聞きたくて堪らなくなるように魔法をかけた。奴隷女に昔話が聞きたいとせがまれたタッデオは，ナポリ中から誰よりも頭の回転が速く，口の達者な10人を呼び寄せて，老婆が子供たちに語り聞かせるような面白い話をするようにと命じた。この話から始まり，その後5日間にわたり10話ずつ，語り手たちが古くから伝承されていた昔話を語っていく。ボッカチオの『デカメロン』の語り手たちが，疫病を逃れて別荘に引き籠った7人の年若い貴婦人と3人の青年貴族なのに対し，『ペンタメローネ』の語り手たちは皆ひどい身なりで，腰が曲がっていたり，かさぶただらけであったり，汚かったりした。この『デカメロン』の語り手との著しい対象は，「しかし語りそのものではけっして引けを取らないぞとの，バジーレの並々ならぬ自負心ともとれる」と，杉山洋子・三宅忠明は述べている[8)]。

(3) ナポリ色の強さ

『ペンタメローネ』の特徴の一つとして，ナポリ色の強さが挙げられる。昔話といえば，「昔々あるところに」というように語り始められ，時代も場所も特定されていないことが通例である。さらに，登場する人物も「シンデレ

ラ」や「赤ずきん」など，ニックネームであることが多く，名前で呼ばれる場合も「ジャック」や「ハンス」など，ありきたりな名前に限られている。いっぽう，『ペンタメローネ』の中で登場する地名の多くは，ナポリを中心とした実在の都市である。さらに，収録された昔話の主要な登場人物に，一人一人固有の名前が付けられており，ナポリを中心とするこれらの都市に配置させている。そして，物語のいたるところに，当時のナポリの流行の品や，古いバラッドの文句が表れる。加えて，『ペンタメローネ』は先述のように，ナポリ方言で書かれている。

バジーレはイタリア語も習得し，彼の作品は大多数がイタリア語で書かれていた。広く世に知られるのならば，イタリア語の方が有効であっただろう。それでも，彼がナポリ方言で『ペンタメローネ』を書いたのには，いくつか理由が考えられる。一つは昔話が口伝えで受け継がれてきた口承文芸であったためである。語りによって伝えられてきた昔話は，軽快で素朴な語り口を持っている。それらを保つためには，ナポリを土台とする昔話ならば，ナポリの言葉である方が有効だろう。また，『ペンタメローネ』は，ナポリを中心とした舞台であること，物語の各所にナポリ独自のモチーフが含まれているという点から，ナポリの人間を対象として描いたものだとわかる。最後に，ナポリ方言が彼の母国語であった点から，ナポリ方言を操る方が，イタリア語よりも自由な表現が可能だったのだろう。収録されている昔話はバジーレが幼い頃よりナポリ語で聞いていたものをもとにしたものが大多数だと考えられ，それらを文学的に脚色する際に，表現に限界のあるイタリア語で書くことは必要なかったのであろう[9]。

Ⅱ　『ペンタメローネ』と他の童話集

(1)「いばら姫」と「日と月とターリア」

第２章では，かの有名なグリム兄弟の昔話集である『グリム童話集』との内容を比較してみたい。グリム兄弟が生きていた時代（1700年代後半から1800

年代半ば)，当時のドイツは300余りの地方諸侯が分立する領邦国家であった。しかし，ヨーロッパに近代国民国家が成立し始める時期であり，イギリスでは産業革命が進み，フランスにも強力な国民国家が出来つつあった。ドイツもナポレオンによる侵略を経て民族意識が高められ，国家統一を目指していった。そのような流れの中で，グリム兄弟はドイツに昔から伝わる口承メルヘンを集めて出版することで，人々にドイツ国民としての自覚をかき立たせようとした[10)]。実際のところ，グリム兄弟が集めた話は必ずしも生粋のドイツの物語とは言えなかった。外国のものや話の断片など，本来の目的とは離れた様々なものが含まれていたが，グリム兄弟はあえてそれらの資料の中から民族共通の伝承を見出そうとした。同時に近代国民国家にふさわしいモラルや家庭像を示すことも考え，それらの意図を持って集めた昔話の資料を書き換えていった[11)]。

『グリム童話集』に集められた昔話の中の一つに「いばら姫」がある。同様の話は『ペンタメローネ』の中にも存在する。また，この話はグリム以前のフランスのペローによる童話集の中にある「眠れる森の美女」に由来している話である。したがって本節ではこの物語を比較することにする。

『グリム童話集』の「いばら姫」をグリム兄弟に語った人物は，従来ではグリム兄弟と親交のあった，教育を受けていない，文字の読めないマリーという老婆であると信じられていた。しかし，後の研究によって，中級階級出身の教養のある若い女性であるマリー・ハッセンプフルークだと証明された[12)]。彼女の母親がフランスのユグノーの子孫で，家庭内ではフランス語が話されていたことから，ペローの「眠れる森の美女」の話を知っていても不自然ではない。そのため，マリーからグリム兄弟に語られた「いばら姫」は，ペローの「眠れる森の美女」の話に依っているが，弟ヴィルヘルムの手によって巧にドイツ風の物語に変えられた。フランスの宮廷料理である「うずらや，きじの肉のいっぱいささった焼き串」は単純にドイツ風の「焼き肉」に，「プリンス」等の外来語も全てドイツ語に書き換えられている。話の内容はマリーの話をもとに版を重ねるごとに手を加えていき，一般に知られる「いばら

姫」の形を成していった[13)]。

『グリム童話集』の「いばら姫」のあらすじは次のようなものである。王女の生誕の祝いに呼ばれなかった13番目の妖精は王女に指につむを指して死ぬという死の予言をする。他の妖精たちは呪いを和らげようと，百年の眠りにおちるということに変更する。王はそれでも国中のつむをすべて処分してしまう。しかし王女が15歳になったある日，城にある古い搭で亜麻を紡ぐ老婆を発見し，自分も紡ごうとしてつむに刺さって予言の通りに眠りに落ちてしまう。眠りの呪いは城中に広がり，全てのものが眠り，いばらで城中が覆われてしまう。長い年月の後，一人の王子が城に入り王女にキスをすると呪いはとかれ，城中が目覚める。二人は結婚し幸せに暮らす。『グリム童話集』ではここで話は終わり，その後は語られていない。

いっぽう，『ペンタメローネ』の話の5日の5話目の中で語られている「日と月とターリア」が，『ペンタメローネ』のなかで「いばら姫」に似た話にあたる。王女ターリアの誕生の際に，国中の賢者や予言者が，「王女が亜麻に混じった何かの棘で危険な目にあう」という予言をする。王は館内に麻や亜麻の持ち込みを禁止した。ところがある日窓辺から外を見ていたターリアは糸をつむぎながら歩いてくる老婆を見て興味を持ち，糸を紡いでしまう。危惧されていた通り，亜麻に混じっていた棘が爪の下に深く刺さり，ターリアはその場に倒れこときれてしまう。悲しみに打ちひしがれた王はターリアを残して館を去ってしまう。それからしばらくして別の王が狩りにやってきた際，偶然にこの館を発見する。館の中でターリアを発見した王は，ターリアの美しさに魅せられて愛の果実を摘み取って（レイプして）しまうが，その後自分の国に戻ってこのことを忘れてしまう。それから9か月がたちターリアは男女の双子，ソーレ（日）とルーナ（月）を出産する。ある時，どちらかの赤ん坊がお乳を吸おうして，思わずターリアの指先に刺さった棘を吸い出し，ターリアの目が覚める。またある日，ターリアのことを思い出した王はもう一度館を訪れ，姫が目覚めて双子の子供までいるのを見て大喜びをする。

しかし物語はここで終わるのではない。王には既に妃がいて，王の様子が

怪しいと気付く。そして王に隠し子がいるのを知って双子を館から連れ出し，料理人に料理させて王に食べさせようとする。料理人の機転によって山羊を代わりに出すことに成功するが，次にターリアが火あぶりにされそうになる。時間稼ぎにターリアが衣服を１枚ずつ脱いでいるところへ王が現れ，ターリアは助かり，王妃は火の中に投げ入れられる。こうしてターリアは王と結婚し末永く幸せに暮らす。これが『ペンタメローネ』における「いばら姫」の類話である。

(2)「日と月とターリア」後半部分について

『グリム童話集』の「いばら姫」との最も大きな違いはなんといっても後半の部分であろう。「いばら姫」が，姫が目覚めてから王子と結婚して物語を終結させているのに対し，「日と月とターリア」ではその後も物語が続いている。どちらかというと，姫の目覚めはクライマックスというより話の進行の通過点で，目覚めた後の話の方が物語の中心にあるように思える。目覚めた後も話が展開するのは，グリムが手本にした『ペロー童話集』の中の「眠れる森の美女」も同様である。しかし，全てが同じというわけではない。ペローの話は貴族階級の子供向けに書かれたものであるため，「日と月とターリア」のように王の浮気話はとても載せられなかっただろう。恋の相手は王ではなく，まだ結婚していない王子となっている。姫が目覚めた後二人は結婚し，双子の子供とともに城に戻るのだが，こちらで双子の子供を食べようとするのは，王子の実の母親であり，彼女は実は人食いだという設定である。その結果，「日と月とターリア」のような恋愛の三角関係は，嫁と姑の関係へと変化している。家庭で子どもに語られることを目的に出版された『グリム童話集』では，ペローやバジーレのような後半部は，当時の市民階級の倫理観・結婚観にふさわしくないと判断されたためか，つけられていない。代わりとして後半部が独立した話「姑」が初版に載せられたが，やはり余りにも残酷であるとして，その後の版では別の話に差し替えられている[14)]。

さて，様々な型を持つ「いばら姫」の類話群であるが，バジーレ，グリム，

ペローの３つのタイプで見るなら，バジーレの「日と月とターリア」が最も自然な型であると思われる。眠りにおちる原因の棘が吸い出されたために目が覚めるというのは，王子のキスによる目覚めと比べると全くロマンチックではないが，目覚めた理由がはっきりしている。また，王の浮気を知り怒り狂った王妃が，浮気相手の子供を殺して王に食べさせようとする方が，王子の母親が人食いだったために子供を食べようとするという話よりも，王妃の心理を考えると自然な流れに思われる。ペローの「眠れる森の美女」はモラルを重視した内容にするために書き換えた結果，人食いであるという不自然な理由を述べなくてはならなくなったのであろう。バジーレの「日と月とターリア」は，口承で伝えられてきた話の原型を他の２つと比べて最も保っている物語といえる。

Ⅲ　『ペンタメローネ』とジェンダー

(1) 昔話のジェンダー観と『ペンタメローネ』

Ⅱ章で述べたように，ドイツ国民に近代国家としてのモラルや家庭像を説こうとした『グリム童話集』や，貴族階級に向けた『ペロー童話集』と比べると，『ペンタメローネ』は大変表現が自由であるように感じられる。

「日と月とターリア」の話以外にも，当然この傾向はある。例えば『ペンタメローネ』の中の１日目第６話で語られる「灰かぶり猫」では，裁縫の先生の企てに乗って，主人公であるゼゾッラが継母を殺してしまうのである。この「灰かぶり猫」は，私達に馴染みのある「シンデレラ」の類話であり，細部に違いはあるが，継母や義理の姉に虐げられる，姿を変えて王子と出会う，落とした靴の持ち主を探す，というお馴染みのモチーフは共通している。その決められたモチーフを含みつつも，この話は一般に知られた「シンデレラ」の主人公とは違った印象を与える。『グリム童話集』には「灰かぶり」，『ペロー童話集』には「サンドリヨン」と，「シンデレラ」の話がそれぞれ収録されているが，日本で浸透しているのはペローの「サンドリヨン」の方で

ある。絵本にするにあたり，カボチャの馬車やガラスの靴等のモチーフがあり，場面の画像化がしやすいのが理由だろう。有名なディズニーの映画もペローの「サンドリヨン」を原作にしている。

その一般的な「シンデレラ」のヒロインのイメージは，美しさがなによりの取り柄で，優しく従順な，受動的な女性である。それは童話で描かれる共通のヒロイン像で，いずれも清らかな心の無力な女性であり，耐えることで完璧な存在である王子と結ばれ幸せになれるというという結末が用意されている。いっぽうで，能動的な女性や力のある女性は否定されることが多く，魔女と呼ばれ排除されることもある。ヒロイン像は当時の男性から見た理想の女性像だったのだろう。童話の女性の描かれ方は，19 世紀後半から 20 世紀にかけてジェンダーの観点から問題視され，時代遅れの考え方だとして批判されている[15)]。

いっぽうで，『ペンタメローネ』の「灰かぶり猫」の主人公ゼゾッラは先述のように，継母殺しを行い，自分の欲求を叶えるために行動するという，当時の男性から見た理想の女性像のヒロイン達とは大きく異なった人物である。『ペンタメローネ』には，その他にもヒロインが活躍する話が多数収録されている。「日と月のターリア」の姫ですら，王の妃に火あぶりにされそうになった時には，衣服を脱ぎながら叫んで助けを呼んでいる。枠物語の大枠であるゾーザがタッデオ王子を取られた悲劇の話も，彼女はただ悲しみに暮れるだけでなく，結婚まで済ませてしまったタッデオを取り戻すために，すべての始まりである昔話が聞きたくなる魔法を横取りした相手にかけるのである。童話の有名なヒロインである「シンデレラ」や「白雪姫」の受動的なイメージと比べて，かなり逞しく描かれ，困難に自分から立ち向かっているように感じる。

グリムやペローの童話集は対象とする読者や目的に合わせて，女性の理想の姿がより強調された型を選んだ，または編集したのではないか。そして，受け取る側である民衆も，無力で従順で自己主張をしない女性を美徳とし，こうしたヒロイン像はより広まっていったのではないか。結果，昔話のヒロ

イン達は受動的で苦難に耐えることで幸せを掴むというのが，現在の私達の一般的な認識とされているのだろう。『ペンタメローネ』のなかの女性にも，そういった受動的な部分も確かに存在するが，彼女達は自ら困難に立ち向かおうとするという，受身なだけではない面も持ち合わせている。姉のアドリアーナが高名な歌手で，彼女の助力でナポリの上流階級に出入りしていたバジーレにとって[16]，女性にそのような印象はなかったのかもしれない。

（2）時代に適応する昔話

昔話は識字率の高くなかった時代から，口承によって人々の間で共有される娯楽であった。かつては神話や伝説と同じ温床で育ったものであり，同じモチーフを持つものも少なくはなかった。しかし，神話や伝説の継承の場合は，語り手の話を聞き手は疑わず，恭しく拝聴する必要があった。先祖から伝えられたものを，正しく後世に伝えなければならないからである。だが，昔話の場合には伝承の方法が異なる。昔話は伝え聞いた昔話をおうむ返しに語り聞かせるのではなく，聞き手の反応を感じながら語る。その中で，より楽しめるようにと，新しく内容を加えたり改めたりすることで，新たな昔話のタイプを増やしてきた[17]。

昔話は語られた時代によって，民衆の願望や価値観，モラルや信仰などの，さまざまな文化や風習を反映し，物語は変化を遂げてきた。その中には当然伝統的な男性観や女性観も含まれる。時代が進み，口承から文字へと昔話の形態が変化する中で，村レベルで伝わっていた昔話は，さらに大きな単位へと広がりを見せた。そうした，社会の変遷の中で適応に成功したのが，グリム兄弟などの著名な作家たちである。彼らは，それまでの昔話が時代や風習に合わせて様々に変化してきたように，昔話に当時の時代にふさわしい規範を加えていった。

「男は仕事，女は家庭」という考え方が生まれたのは，実は近代に入ってからである。産業が発展し，核家族化が進む中で，女性に求められたのは，家を管理し，夫を助け，子供を教育するという，「よき妻」であり「よき母」

であることだった。そして，夫に仕える存在として理想とされたのが，無知で従順な女性だったのである。時代が進み，男女平等が唱えられる現代では，ジェンダーの観点から問題とされる描写も，当時は美点だったのだ[18)]。

『ペンタメローネ』は，近代メルヘンの像が生まれる以前に出版されたものであり，違った趣を持っている。当時のイタリアもまた，統一されたものではなく，小国の集まりであった。そういう点ではドイツと似たような関係であったかもしれないが，イタリアで統一運動が起こったのは，『ペンタメローネ』が書かれた時代より後の話である。つまり，近代市民社会のモラルや価値観は，『ペンタメローネ』の中には描かれていない。『ペンタメローネ』の中に描かれるのは，王子と王女の結婚によるハッピーエンドという単純な図式では終わらず，結婚後の三角関係などの，もっと複雑な人間関係である。近代市民社会にふさわしくないとして近代のメルヘンで書き換えられたような内容も，ここでは削除されることなく存在し，読むことが出来る。

グリム兄弟やペローによって浸透した童話のヒロインのイメージで『ペンタメローネ』の物語の女性達を見ると，その活発さに驚かされる。そこには確かにヨーロッパに深く根付く父権制の影響も見られるが，女性達は積極的に道を切り開く強さも持ち合わせている。『グリム童話集』や『ペロー童話集』が出版される以前の『ペンタメローネ』の中には，グリムやペローが求めたような規範に縛られることのなかったヒロインたちが，生き生きと活躍しているのである。

おわりに

『ペンタメローネ』について研究するにあたり，まず初めに私が行なったことは，当然その物語を読むことだった。そして驚くほどに，『ペンタメローネ』の物語の中に，小さい頃から親しんできた絵本の物語と共通のモチーフを見たのである。調べる中で，「シンデレラ」や「いばら姫」などの話には，他にもたくさんの型が存在していることを知った。必ずしもグリムやペロー

の話が，物語の定番の型ではなかったのだ。私の持っていた童話のイメージの数々は，明確な意図をもって採択された，近代社会にふさわしいとされてきた物語の型だったのである。

『ペンタメローネ』の調査をする中で，昔話の変遷について多少ではあるが触れることが出来た。昔話は現代でも文化に合わせて変化している。先述の通り，昔話に見られる女性のあり方は，現在見直されるようになっている。優しくて従順なヒロインに不満を抱いた語り手の中には，子供に聞かせる中で，己の意志を通すヒロインを語る者もいるらしい[19]。また，インターネットの普及により，この先昔話の伝承にも変化が生じてくるかもしれない。はるか昔から語り継がれてきた昔話が，グローバルな社会の中でどのように生きていくのかを追っていくのも面白いだろう。

注

1）ジャンバッティスタ・バジーレ（杉山洋子，三宅忠明訳）『ペンタメローネ』大修館書店，1995年，pp. 1-2。
2）ヤーコプ・グリム，ヴィルヘルム・グリム（高木昌史，高木真理子編訳）『グリム兄弟　メルヘン論集』法政大学出版局，2008年，pp. 139-140。（グリム兄弟『子供と家庭の童話集』第3巻，レクラム版，pp. 290-294の翻訳）
3）鳥居正雄「Fiabe italianeの光と影」『イタリア学会誌』第38号，1988年，p. 152。Pompeo Sarnelliは1649～1724，聖職者，作家。バーリ近郊のポリニャーノに生まれるが，14歳頃からナポリに移ったためにナポリ語に強い愛着を持ち，ナポリ語の作家の作品を手本に格調高いナポリ語を習得しようと努力した。
4）同上，p. 152。
5）本論文はこの版をテクストとする。
6）須田康之『グリム童話＜需要＞の社会学-翻訳者の意識と読者の読み-』東洋館出版社，2003年，pp. 93-94。
7）ジャンバッティスタ・バジーレ（杉山洋子，三宅忠明訳）『ペンタメローネ』大修館書店，1995年，pp. 1-2。
8）同上，「前書き」pp. 1-2。
9）鳥居正雄，前掲論文，pp. 150-152。
10）竹原威滋『グリム童話と近代メルヘン』三弥井書店，2005年，pp. 20-21。

11）同上，pp. 20-21。
12）同上，pp. 90-92。
13）同上，pp. 95-98。
14）同上，p. 107。
15）稲田浩二（編者代表）『世界昔話ハンドブック』三省堂，2004 年，p. 225。
16）ヤーコプ・グリム，ヴィルヘルム・グリム（高木昌史，高木真理子編訳），前掲書，p. 140。
17）稲田浩二（編者代表），前掲書，pp. 18-19。
18）池上俊一『魔女と聖女　ヨーロッパ中・近世の女たち』講談社，1992 年，pp. 136-139。
19）稲田浩二（編者代表），前掲書，p. 225。

参考文献

・ジャンバッティスタ・バジーレ（杉山洋子，三宅忠明訳）『ペンタメローネ』大修館書店，1995 年。
・竹原威滋『グリム童話と近代メルヘン』三弥井書店，2005 年。
・鳥居正雄「Fiabe italiane の光と影」『イタリア学会誌』第 38 号，1988 年，pp. 143-169。
・北垣篤「バジーレの『ペンタメローネ』のヨーロッパにおける受容」『イタリア学会誌』第 31 号，1984 年，pp. 129-147。
・稲田浩二（編者代表）『世界昔話ハンドブック』三省堂，2004 年。
・『集英社　世界文学大事典 3』集英社，1997 年。
・ヤーコプ・グリム，ヴィルヘルム・グリム（高木昌史，高木真理子編訳）『グリム兄弟　メルヘン論集』法政大学出版局，2008 年。
・須田康之『グリム童話＜需要＞の社会学-翻訳者の意識と読者の読み-』東洋館出版社，2003 年。
・浜本隆志・伊藤誠宏・柏木治・森貴史・溝井裕一『ヨーロッパ・ジェンダー文化論　女神信仰・社会風俗・結婚観の軌跡』明石書店，2011 年。
・池上俊一『魔女と聖女　ヨーロッパ中・近世の女たち』講談社，1992 年。